

## ミミブサタケ *Wynnea gigantea* Berk. & M. A. Curtis

子嚢菌門 *Ascomycota* チャワソタケ亜門 *Pezizomycotina* チャワソタケ綱 *Pezizomycetes*  
チャワソタケ目 *Pezizales* ベニチャワソタケ科 *Sarcoscyphaceae* ミミブサタケ属 *Wynnea*

### 供試標本

茅野市八ヶ岳総合博物館標本菌類 F-00554, 2018年9月23日, 長野県茅野市米沢吉田山, 市川浩久採集; F-00656, 2019年7月16日, 同所, 市川浩久採集; F-00667, 2019年7月27日, 同所, 市川浩久採集

### 肉眼的特徴

図1,2

地中に生じた塊状の菌核から柄が地表に向かって伸長し、子嚢果を形成する。柄と子嚢果の全体の高さは11.0–21.5 cm。子嚢果は、地上部で10以上の複数に分岐した柄と、各々の頂端に形成されたスプーン状の子嚢盤よりなる。柄の地上部は、高さ約1.5 cm、径1.1–1.3 cmで短円柱状、表面は暗褐色、縦線を生じ肉はクリーム色。個々の子嚢盤は高さ5.5–7.0 cm、径2.5–4.5 cm、初めは黄褐色から褐色、のちに焦茶色になる。托外被は子嚢盤と同色、肉は厚さ0.1–0.2 cm、クリーム色のち肉色に変色する。特徴的な臭いはなく、味はわずかに辛い。

### 顕微鏡的特徴

観察は、上記熱乾燥標本 (F-00554, F-00656, F-00667) に基づき、子嚢盤切片を3%水酸化カリウム (KOH) 水溶液にて封入してプレパラートを作製して行った。子嚢胞子は3%KOH水溶液で、子嚢やその他の組織は3%KOH水溶液にコンゴレッドを追加して観察した。托外被は24.9–50.4 × 12.7–19.5 μm (n=20, 2標本) の棍棒状細胞が子実層状に並ぶ (図3)。托髓層は幅9.4–14.3 μm (n=10, 1標本) の絡み合い菌糸で薄膜の菌糸からなる (図4)。子嚢は293.6–356.8 × 14.9–16.4 μm (n=10, 3標本) の円筒形で下方に向かって細まり、内部に8個の子嚢胞子を生じる (図5)。頂孔はメルツァー溶液で変色しない。子嚢胞子は(23.0–)26.3–30.9(–39.8) × (12.0–)13.3–15.0(–17.0) μm、縦横比は1.9–2.1、縦横比平均は2.0 (n=110, 3標本) で長楕円形からやや紡錘形、厚壁で無色透明 (図6)。メルツァー溶液で赤褐色に変色し、偽アミロイド反応を示すものと、変色しないものが混在する。側糸は幅4.3–6.1 μm (n=20, 3標本) の糸状で、先端は5.0–7.5 μm (n=37, 3標本) とわずかに膨らみ、隔壁があり分岐する (図7)。

### 生態的特徴

供試標本は標高951 mから1003 mの、コナラ、ヤマザクラが混在するアカマツ林内に発生する。

### ノート

文献1では子嚢の長さ250–280 μm、側糸は幅2.5–3 μmであり本標本と比べて小さい。しかし、子嚢の幅や子嚢胞子の大きさ、肉眼的特徴は概ねこれまでの記載と一致することから本標本を *W. gigantea* と同定した。類似種のオオミノミミブサタケ *W. americana* Thaxt. は子嚢胞子が32–47 μmと本種よりも大きく、両端に小さい乳頭状突起があることで区別できる (今関・本郷, 1989)。ウサギノミミ *W. macrotis* (Berk.) Berk. & M.A. Curtis はミミブサタケの異名として取り扱われている (大谷, 1980)。

### 文献

- 1 今関六也・本郷次雄 (1989) 原色日本新菌類図鑑 (II), 保育社, P267
- 2 大谷吉雄 (1980) 日本産ベニチャワソタケ亜目, 日菌報 21, P160

担当 市川浩久、上原裕雄、牛山雄二、小山明人、斎藤和春、中島年雄、宮坂るり子

監修 慶應義塾大学准教授 糟谷大河



図1 子実体 F-00667



図2 野外での発生状況 F-00554

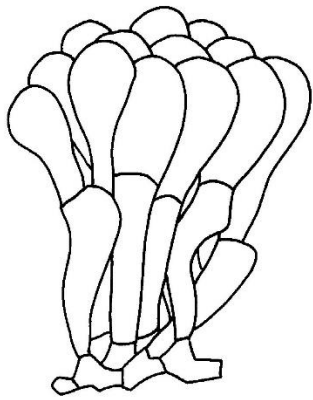


図3 托外被



50 $\mu$ m

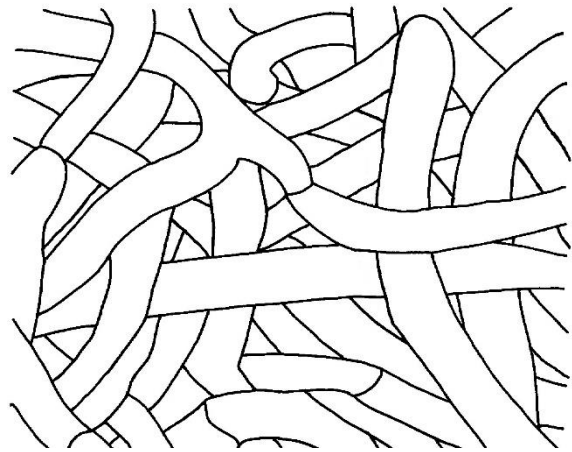


図4 托髓層



50 $\mu$ m



図5 子囊 50 $\mu$ m

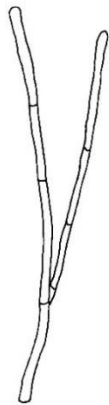


図6 側糸 50 $\mu$ m

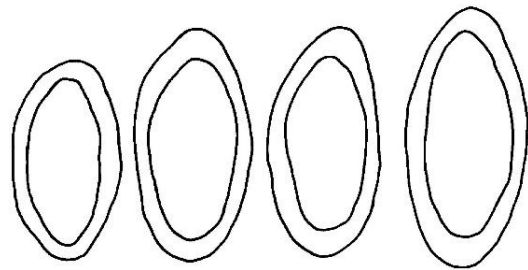


図7 子囊孢子



10 $\mu$ m